

トイマ

T O I M A

と
い
ま

昭和二十五年七月五日
昭和二十五年七月十日

發行
印刷

(毎月一回
十日發行)

第三卷第四號



六・七月號



と い ま

『聲』

美しい雲がわたをちぎつたやうに浮いてゐる

小鳥の歌聲 緑の草木が

微風にゆれてほゝえんでゐる

私達は、此の自然からあまりにはなれてはいないだらうか
ちつと自然を見つめたら

私達は何か心を感じはしないだらうか

近づかう自然に

きつと 私達に何か教へてくれるに違いない

(弘二)

目次

扉・聲 弘 二 生

忘れられぬ誠と愛 大澤 隠 石 (一)

宿命の人々 成 田 英 治 (二)

思いのままだに 藤 井 生 (三)

春 草 本 春 男 (三)

所 感 松 川 東 (四)

短 歌 扉 畑 忠 雄 選 (五)

俳 句 阿 部 み どり 女 選 (六)

川 柳 濱 夢 助 選 (七)

詩 秋 山 恵 三 選 (三)

リンカン傳を讀みて 大 林 隠 石 (六)





忘れられぬ誠と愛

大澤 隠石

交戦のさなかのことであつた。

我が家より程遠からぬ處に老夫婦の棲まうささやかなる杉皮を屋根にした家があつた。家と云ふより小屋に等しく風が吹けば屋根が飛びさうであり、少し雨が強いと寝間にさえ盟が置かれることもあつた。雨洩りを受ける爲に。

眞面目な獨り息子が赤紙に應じ、老夫婦は其の日のなりわいのため老女は日雇い老人はさるなど作つていた。私は老夫婦慰撫の意味で自分達の不如意の中から何かと割合し、郷里の友から珍らしい魚など送られると私は愛人の許に行くような思いで駆けつけた。老人は魚が大好物だからである。どうも有難うがんと白髪頭を丁寧に下げ、さも嬉れしげに振舞う老夫婦の姿を見ると何かしら自分の亡き両親に繋がるものの喜びを感じる。

母がとても肩のこりがひどかつた。よく母は私に三郎、私の肩を叩いてくれるようにといかにも苦しうな様子で私に背を向けたものである。ヤンチャだつた少年なる私は其の度に金をせびり、申譯けに拳を握つて連射を肩に浴びせては逃げさり、與へられた金で飴を求めてはしやぶり、ねじりをかじつて遊ぶことに大童である。食べる物がなくなると母の許に行き、殊勝らしく進んで肩を叩いてやらうかと云ふ。母は私の腹底を見すかして居ながら、そうか、と笑を浮べながら背をむける。又申譯に肩を叩いては金をもらひ遊びに身を打ち込む。着物は破る、下駄は割る、擦り傷など物の數ではなく遊んだ。

それでも幸い學校の成績は落第点ではなかつたので母は立ち入つて注意もせず、變り無い慈愛を以て私を包んでくれ、

厳格な父にとりなしては私に最大限度の自由を與へてくれた。

敵千人、味方千人、世評の口戸は閉する能はないが私にとつてはかけ換へのない善い母であつた。私は母の乱れ髪を見た事がない。いつも小さい五つの髪に結び上げ、襟元を地味な半襟で合せ衣類も帯も人目を魅する物を着なかつた母、それでいて三味を弾いては父を慰撫し父の秘書として其の勞を惜まなかつた母、父は女婿にかかはらず父に口應をせず、黙々として十五名程の台所の切り廻しから外交、會計、父の弟子達への讀み書き珠算の教授に餘念のない上に、子供の衣類を縫ふ爲畫の間に幾本もの縫針に糸を通してをき、夜私達に添乳をしながら私達の衣類を調縫したそうだ。其の現狀を目撃した私の友の姉が「そんなにまでなさらずとも誰かに依頼みなすつたら」と云うのを「私はお金を惜むのではありません愛する子供達には自分で縫つたものを着せてやりたいのです。」

「ネー三郎さん、貴女のお母さんはこんなに家を思い貴女がたのことを思つていたのです。私はお母様の意中をお聞きした時頭が下りました」この友の姉古川愛子氏に母のことを述べられた時、當時青年だつた私の若い血の中にありし日の母の愛情がひしひしとして情心に焼印させられたことは言ふまでもない。

虚弱な母であつた其のか弱き体に鞭打つて、家の爲、世の爲、我が子達のため己が生命のあらん限りを擦りへらして、「私は死なない、私は死なない」との言葉をこの世の最後として三十六歳を一期に姉妹中心臓麻痺で逝つたのである。父は父で母を追ふ如く翌年幽明境を異にした。

親なきが故の言ひ譯かも知れぬが青年期を迎へ壯年の今日でも、逝きし母を偲ぶ時私は全血の凝結を感じる。母の死の原因は母の生前、母の肩を揉んでやらなかつたから——と云ふ子供じみた責任感が身体を縛りつけ、瞑目すると目が潰れよとばかり母の臨終の姿が私を捕へて離さない。

母の柩の周圍に幾數百の人々が涙しつゝ、再び歸らざる葬りの場所に見送つてくれた。其の母の子として價値なき自らを今向なげく——。偶私は醫局に於て——病者の爲に生きて居る——と思はれる程の主婦長に目接する。アーテスト主婦が「病母の像」と題して主婦長の自像をものされだ、昨秋手藝展に出品されたが、確かに主婦は言ひ當てたと思ふ。

願くは、我等の主婦長の上に健康の加へられんことを——祝福が豊かにありますように。

因みに記したいことは、私は過去二十年亡き母の肖像を私の書齋に掲げ、ありし日の母を偲びつゝ謹戒自肅の對照としてゐた。處がこゝへ來るに當つて子供達に割合することにしたのであるけれど、私は二十年母の肖像に叱られることの方が

多かつた——三郎よ——お前は私の子として、神の下僕として
まだまだ足りない者ではないか」と。

北海の地に棲み、背に入墨をし、荒くる男を領で使ひ得る
程の實兄が私の許を訪ねての際、自分の其の時の年よりも十
も下なる母の肖像の前に立ち「あ、お袋は怖い——頭をか
いて苦笑し母の肖像を避けたことを忘れられない。道義的
をはずれた行爲をする時、今でも母の遺責は私達の肺腑を貫
くのである。私は母の面影に似たH婦長の肖像をミスターH
から寄與され己が室に掲げた。まではよかつたが、今度は
母と二人で私の足りなさを責め立てられるのだからたまらな
い。文字通り桑原もので——あるけれど嬉しい。

◆ ◆ ◆
『忘れられぬ誠』

この主役者は劈筆の老爺をマティアリアル（題材）したの
であつたが、私の靈魂に母が棲みH婦長の肖像がある限
り（肖像がなくなつても忘れられない）心に湧きたつ思ひを
いつかわ口にし、記表するのは當然である。けれど亡き母の
ことを行々しく書きたてた事は面はゆく照れを覺ゆる。然し
書いてしまつたからには讀者の賢察を願はねばならない。そ

れに代えてH婦長は、假令拙文であつても婦長の人物に多く
の人達が接觸して居るのだから大威張りで書ける思ひがす
る。

私はH婦におむねる意味ではなく、世の一人でも多くにH
婦長の立派さを識つてもらひたいと願ふ。そして眞のレブラ
救済は「神の如き愛」を基とした同情、看護、接接である
の認識をより深めて戴けたら同病者の爲どんなに幸ひなこと
か——。

駄文なるが故に、讀者に飽かれはしないかとびく／＼者で
あるが、そうした方々には御勘辯を願つて話をもとに返して
ペンを進めてみる。

◆ ◆ ◆
山をぬく力よりなを
世の人を

うごかすのは
まことなりけり

或る寒々とした午后であつた。私は公用で老夫妻の家を訪
ねた。老嫗は留守で老爺がチヨロチヨロと火の燃ゆる爐端で
佗しそうに焚つくりをしていた。私は簡単に用向きを話す
と、老爺はいきなり私に「先生（私は決してこんな敬稱を以
て云はれる者ではないが）ほんとに申譯がせん、相悪くお茶

も何もなくてつ」と泣かんばかりの面射して私に訴へる如く言つたものである。

物のある時はそのありたけ出しててもてなしてくれる老夫婦だつた。よくよくの事である。私の胸は慄へた。生活の不如意に對する同情であると同時に反對の喜びである。人の誠に觸れた發見の喜悅である。

キリストが褡褳の中に入れた寡婦のレプタ二枚（五厘）を、他の多くを入れた者より多しとして嘉賞なし給ふた。貧しき寡婦は財布の有ぎり即ち生命の代の凡てを捧げたからである。私は寡婦のそれに似た喜悅を老爺に感じ「其の氣持だけではんと結構、ではまた來ますからさばんちゃんが歸られたら宜敷くね」と丁寧につむりを下げて家を出た。

ぬくみの混つた感激が身うちに沁みてくる無精に叫びたくなる。寒さや咽喉の喝きは何處かに行き足は自づと兎の駆る如くに軽い。私は讚美歌を口づさみながら小道を踏んで行く。それは人の眞の誠に觸れた歡喜の歌であり足踏みてある。

◇

◇

◇

◇

◇

◇

然し、敗戦となり、民主主義と變り、自由だ男女同權だナシヨナリズムだと叫んでも、之等凡てが眞實と誠と愛とに依つて打ち建てられたものでなければ砂上の樓閣に終るであらう。せち辛くなつた社會生活を目のあたりにして、眞面目に生きんとする者は眞實に生きる世界、安んじて生きられる世界を砂漠でオアシスを求めるようにどんなに渴望してをるこゝとであらう――。

接那的であつたり、打算、形式的禮儀を以つて好意を傾けたとて、果してそれが對者の心線に觸れ切るであらうか。

人間相互の福祉を爾す爲には、眞實なる愛が必要と思ふ。

人を愛し、愛し、愛し抜いて相手に憎む隙を與へなくなつたら敵はなくなるであらうし、其の人は滅ばされないであらう、従つて戦争も地上から姿を消すであらう。

私は専門政治家でないから政治の複雑性を識らない。専門政治家は、なまぬるい愛などに依つて政治は牛耳れるものでないと蹴するかも知れぬが、私は何と言はれようと愛と誠を叫びたい。

あれから日が経ち、月を重ね星霜幾年、その間國狀は激流に飛沫をあげる勢で變つた。従つて私の生活も環境も現實と思へぬ程變り果てた。

愛は國境を越え、人種の差別を脱し、山を越へ海を渡り、滔々泊々として人間の靈魂に歡喜を與へ幸福を息吹して止まない。けれども博愛、全愛、聖愛に生きると云ふことは容易な

ことではなし遂げられぬと思ふ。

「愛は惜みなく奪ふ」と或る文士が言はれた、であるかも知れぬ。だが私は愛は惜みなく與ふ」と言ひたくなる。と言つて何もかにも與へよと言つて居るのではない。パンパン式であつてはならぬ。

愛は對者に生命を捧ぐることであつても不義を責めるに怒髪天を抜く程の厳しさがなければならぬ。

愛なるキリストの生涯に宮潔めがある。

イエス宮に入り、その内なる凡ての賣買する者を逐いだし、兩替する者の臺、鴿を賣る者の腰掛を倒して言い給ふ、「わが家は祈の家と稱へらるべし」と録されたるに之を強盜の巢となす」(マタイ傳三十一章十二節、十三節)

即ち不義に對する激怒である祭司長學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る——と末句にあるからにはイエスの此の態度に依つて敵方の反感に拍車をかけたことは否めない。

憤む程愛する、此れが愛だ。誰かの言である愛は或る場合峻烈である。

孟母織を斷ちて子を誡むの圖は私達の襟を正させずにはおかれない。

愛の中には平和があり満足があり喜悅があり勝利は必然であるが、愛の實行者には激烈な苦杯を飲みほさねばならぬこ

とを忘れてはいけぬと思ふ。

キリストは人類の救いを完成す可く十字架におかかりになり給ふたのであるが、キリストが十字架にかかれる爲の決定的準備はゲツセマネの祈禱にあると言つてもよい。

「父よ、御旨ならば此の酒杯を我より取り去りたまへ。然れど我が意にあらずして御意の成らんことを願ふ。」

何たる悲壯なる禱告であらうか。イエス悲しみ迫りいよいよ切に祈り給へば汗は地に落つる血の雫の如し、とルカは書き記している。

前半句はキリストが人として憂悶逃避の偽りなき訴へである。

彼はゲツセマネの園に行くに當り、特選の弟子三人を同伴し「わが心いたく憂いて死ぬるばかりなり。汝ら此處に止りて我と共に目を覺しをれ」と切實な情を告げている。キリストと弟子達との距離は石の投げらるる程であつた。

肉體はもろい。斯く主に依頼され乍ら弟子達は三度も眠りこけてしまつたのである。血の雫をしたたらせつつ祈つてゐる己が身近に、最愛の弟子が眠りこけて居る其の姿を目前にしたキリストの心境やいかに。私はこの場を思ひめぐらす時總身は栗肌となる。あ人間の肉體はもろく限られてゐる。

園の祈りを経へたキリストは、眠りこけた弟子の不實を責めることなく「今は休みなさい、お前達の心は熱すれども

體が弱いのだから致し方がない」と、勞りの言葉をかけておられる。偉大なる哉キリストの愛よー。

罪を憎むとも人を憎まず。私達はこの言葉をよく口にすることが實際行爲に至つては果してどうであらうか。人が罪を犯したり凋落すると、貴女を絶対に信じますとかどんな事でも致しますとかの固き誓ひはどこへやら、見榮とか、外間とか家柄とか、或は理窟ならざる理窟のもとに敬遠し忌避し、敵となり平氣で相手を捨ててけりりとしてゐる。

北極の風よりも冷たき世の無情を、凡らくレブラ者の九十九パーセントまでの骨の髄迄込みこんでゐることであらう。

其の点キリストの温情は海の如くである。キリストが最初

に病者を潔め給ふたのは、人の忌避する癩者である。又森澤の折捕へた女マダダのマリヤと云ふ、イエスの許に連れ來つた時、彼は女を罪より開放し靈の救ひを與へた。此の時より彼女の生活は百八十度の展開を示したのである。更生マリヤの精進の素晴さは女弟子中陸目の器となつた。またイエスは癩病人ジモンなどの家に氣輕に訪問され慰籍して居るし、カナの婚宴に行き給ふて水を葡萄酒にかへ宴席を賑はしておられる。

キリストは世の中年ミスボーイ達によく抱く變体的令血漢でなく、喜ぶ者と共に心から喜び、悲しむ者と悲しみ涙する時は涙りなく涙せられた。我々病者は偽らない處一眞に喜悲

哀樂を共にしてくれる「愛なる人」に饑えてゐるのである。

人類を愛し続けたキリストは、今や弟子ユダに賣られ、民衆に唾せられ、鞭打たれ、罵詈雑言の中に町中を引き廻された揚句ゴルゴタ即ち髑髏の丘上に引かれて行く。

あー人類の救主キリスト、イエスは二千年前斯くして磔殺された。

然しイエスは、息絶ゆる瞬間まで人を愛し、愛し、愛し抜き、愛によつて勝利した。愛に依つて救世主の榮冠を克ち得たのである。キリストこそ惜みなく愛を與へた人だ。

それは各自の体験と自覺に依つて相違するだらうが、愛はきびしさの中に甘さがあり満足があり、喜悅がとものふ。可愛い子には旅をさせるとか、打つて罵らせよの譬謂の如く、愛するが故に鞭があり終りがある。だが心は必らず心に通づるもので愛するが爲の責務は春の前の氷雪である。

それに反して偽善なる愛は九熱の審判を神より受けることを覺悟しなければならぬ。



春だー春だー復活の主を讃へ、釋尊の誕生を祝ふ可き四月の春だ、

硬き土底を破つてみちのくにも、山に野に里に、谷間を躍り越え春のメロデーはそよ風となつて我が療園に訪れて來

た。

友だちも活氣を帶び畑に鋤もつ手も輕やかである。

野球戦のユニホーム姿がグラウンドに小鹿の如く飛び廻つて
いる。それを見てみるとムツムツした高鳴を胸に感じ、年甲
斐もなく—などの名詞は問屋にあづけ—飛びだしてグロージ
を手に球を投げるのである。

時々人は人無き處に立ち、山嶺に向つて鬚聲を張り上げ詩を
吟ずることもある。

園道に桃が綻び、櫻の笑つてくれるのももうすぐだ、在園
五百の誰しもが花見の催しを楽しんでおるのが微笑ましい。
世は移り人は變り、人心は秋の空と儂むことがあつても、
自然は正整呼として四季の恩澤を人間に與へる事は忘れな
い。



—大初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき、この
言は大初に神とともに在り萬の物これに由りて成り、成り
たる物に一つと之によらで成りたるはなし、之に生命あり。
この生命は人の光なりき、光は暗黒に照る—。(ヨハ
ネ傳 一章 一節—五節—) 呼喚 偉大なるかな創造の力
よ。宇宙森羅萬象は神によつて創造られ、人間は神の最も
愛する者として己が像にかたどりて地上に生命を與へ棲は

しめた。神其像の如くに人を創造りたまへり。即ち神の像の
如くに之を創造り、之を男と女に創造したまへり。創世記に
斯くしるされて居る。そして人祖達はエデンの園即ち樂園
にすまう特權を附與されて居たのに。あゝ何たることぞ。憎
む可きサタン(惡魔)は甘言を以つて人祖を神の膝下から遠
ざけ、幸福を目茶目茶にしてしまつたのである。私達は舊約
聖書創世記に目を通す時、奸惡巧妙なるサタンの私語と力と
そのたくみな系蹄に陥入つた人間の哀れな弱き姿を見る。恐
ろしきかな甘言である。

偽善者は殺人罪より重罪なり。道義の目標を高かき置き
情操を培はんとする精神生活者や、名實を旨とする紳士のレ
ベルにまで私達が引き上ぐるに至るならば、清らかな楽しい
そしてお、らかな宛然花の四月の如き社會が建設されるので
はあるまいか。それと知りつつ何故に人間は音楽を求め神へ
の反逆を敢てするのだらうか。これエデンから人祖の幸福を
掻き奪つたサタンが、今尙神の距離から人間を遠ざけるから
である。

サタンは吼へ猛る獅子の如く飲む可き者をたづね求めて居
る。或る場合天使の装ひをもて來り、或る時は威嚇し時とし
て餌をもつて釣る。地獄の沙汰も何とか云ふが、人間は金
力、好色、酒や物力で他愛なく參つてしまふ。自分も過去を
顧省すればひやりとする。人事でない。

ルツターだつたか、ウエスレーだつたか、惡魔の私語を聞いた時、彼はたまりかねて傍にあつたインク壺を叩きつけたと云ふけれど確かにサタンは強烈な力を有している。

新約聖書のロマ書記者パウロは、其の七章の末句に當り、わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。噫われ惱める人なるかな。此の死の體より我を救はん者は誰ぞと悲壯な叫びをしている。

パウロは人間の完成なる救いは、人間の難行苦行や努力に依て齋度し難きを知つてノタウチ廻り、そして力盡きた時初めて彼の全身全靈は神に回けられたのである。

キリストの十字架の犠牲は、人間贖罪の代價であると云ふことを彼は皮肉に刻ませられた。神もし我等らの味方ならば、誰か我らに敵せんや、此處まできたパウロは「私達を神の愛より離れさすものは何物ぞ。患難か苦難か、迫害か飢か、裸か、危険か、劍か、これらのものは我々を愛し給ふ者に頼り、勝ち得て餘りあり」と餘裕を止めて勝鬨を擧げて居り、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の世の造られたるものも、我等の主キリスト、イエスにある神の愛より我等を離

すことが出来ぬと喝破している。

神の能力は絶對である。サタンをして完膚なき迄に至らしめる強烈な爆彈であり、人間勝利のブナイムモーション（原動力）である。私は或る異教し、且つ愛する人の爲に、書画を贈つた。けれど私わ其の人に聖書を贈つたことは何物にも勝れる贈物と思つて居る。私にとつては記念のものであり、大切な聖書であつた。それだけにやり甲斐があつたと思つてゐる。私は其の人の手について「聖書を讀んで下さい」と願つた。私を忘れ他山の石として私などの存在を忘れても結構なのだが、何としても其の人に聖書を識り、聖書に示す神を認めてもらひ度いのである。

人間の力は限られて居ても、全能の神の能力は無限である。靈の世界に年齢なく老若男女貴賤貧富の差別がある筈がない。私は今二十餘年前の知人「悲慘のどん底の作者黒川眸氏を思ひ出している。確かエスペラント譯だつたと思う、残念ながら内容は記憶から去つてしまつたが、何と云つても人間の中から見て癪病の現實は「悲慘のどん底の姿である。

私は又二十餘年來腦裡をおゝてはなれぬ歌がある。それは

コメカミを搔捲りつつ

聞したる呼喝恐ろしき

病のその名

或る癪者が醫者に「あなたはレブラだ」と言はれた時、彼は近親の人達に「俺は癪者ではないレブラだ」と叫び歩いたとか、私は之を稚戯行爲として笑ふことは出来ぬ。癪者にとつて一日一瞬でも「癪病」と云う病の其の名を己から抹殺出来たらどんなに幸福かと願つて居るに違ひない。

然し……斯くの如き人間的に見て、悲惨のどん底と云へる癪者にも活路があり光はある。それは靈魂の救ひである、と私は信じて疑はない、私達は靈魂の救ひを神に依つて体験することにより神の愛を識り、神の眞實を知悉し、眞に人を動かし得る力こそ愛情であり誠であり得るのをと自覺するのである。

愛情と誠があれば、必要が加へられ對者に満足を與へることが出来よう。

私達は如何に物質万能の世となつたからとて、人を動かす力は物や権力や體力ばかりとは云へまい。人の愛と誠とは今でも人を動かす強き力であると私は信じてする。

現に主婦長などの愛の行爲、あの名取の避村の無學な老爺が「何もなくて申譯がせん」と訴へた時の彼の誠は私をして、おじんちゃん 御身のあの時のまごころは私にとつて黄金に換へ難い尊い贈物であつた——と思はせる。供に私の凡ら

く生涯を支配するであろう。誠に對する目標と激勵を與へてをることを以てしても事實である。

山をぬく力より人を動かす力はまことでなければならぬ。

◇

◇

◇

右まで稿を進めて來たのだつたが二週間前風邪が原で床に臥してしまつたが、四日後には急性肺炎を併發、絶對安靜を餘儀なくされ食も攝らず、熱にうかされて夢現の中を彷徨した。

幸ひM女醫の診察をうけペニシリンの注射のお蔭であらう。初めは頭がガンとして破れるような激痛で、或は參るかも知れぬと思つた杞憂も一週間にはうすらひで、これでは生きるかな！と思つたので食を攝つた。實は熱のために食をとれなかつたのは否めなかつたけれど、若し此の世をグットバイするなら尾籠な痕跡を肉体に止めることが耐へられなかつたからでもある。

過去二十年間不眠症で療床した事はあつても、内科症で然も肉親の居らない世界に病で臥した事は初めての經驗である。偶寂情とも悶情ともつかぬやり切れぬものが、私の理性と信仰を掻きさらつて行くのである。

もともと、私は精神生活と信仰に蹉跌を來す時肉体が害さ

れるのである。勿論自分は法律上の罪を犯して居る譯ではないのだが、苟も人一人にても神の道を傳へる者として、神に人に良心に責がないか？と僞らずに自己批評をする時、八ッ裂にしてもあき足らぬ程自己の欺瞞と足りなさが憎くなるのである。

特に世の悲哀と苦淵を嘗め盡して居る同病レブラ者に福音を傳へる爲には、墓をゆすぶり動かして死人を甦へらすだけの信仰より来る能力がなければならぬのである。それは全智全能の神に絶對信をおき、神と同化する事に依つて得らるゝと識り乍らそれが出来ない肉性の弱さ、私は時折一人山を歩き廻りながら自らの靈のみすばらしさに泣くのである。此の度の臥床も確かに靈的に隙があつたからである。

私はかくし立てしたり、自己欺瞞の生活は墓場なのである。天に昇らうが地にかくれようが逃れ場がないのである。

私は同病者の魂に觸れたいのだ。社會の人達に病者に眞の同情と、魂と心に合流してくれる愛なる人を叫び求めたいのである。それを實現するには餘りに己が力が足りなさ過ぎる。

私は熱にうかされながら神の審判に立つ時の恐怖に慄へた。そして神に懺悔せづには居れなかつたのである——イエスの血は凡ての罪より我らを潔め給ふのである——私は神の憐憫を乞ひつつ心底より罪を悔ひ救ひを求め叫んだ。一切を神に

投げ出し懺悔した時初めて心に平和を得神のみ前に行けると思はれたのである。



「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」

私の愛句の一つであるが、孤獨と旅愁とをじつと抱きメながら生涯を道に生き抜いた排聖芭蕉の氣高さが今度程身に徹して追つたことがない。

人は獨りで生れ、又獨りで此の地上を去つて行かねばならない。だから私達は只一人になつて従容と死ねるの準備が出来て居らなければ人として最も不幸な人であり、大語すれば人生の敗殘者と云へよう。

私は私自身を幸せにしたい、と共に同病者は言ふまでもなく知れる限りの人を幸福にしてやりたいのである。僭越紗汰と笑ふ人があるかも知れぬが、私と云う者に割つて入つた人達はこの言葉は偽言でないと言つてくれるであらう。

病床半月、醫師達の懇なる御世話になつた、調診器をあてゝることに依つて先生達は私の病狀が明るであらうが、十五年も人の靈魂を取扱つて來私にとつて、相手の心線が反對に私の心に觸れてくるのである。

半月中種々な人を見舞つてくれた。普段意にあまり解しなかつた人が飛んで來て身の廻りの事を世話し色々と食べ物を

作つては食前に備へてくれたり、此の人ならいざとなつたら世話してくれると思ひ、自分の能ふ限りを盡した人が顔を見せられなかつたりした。然しみみな生きる勉強、生きた體驗をしたのである。

人にことを成す時、報酬を望まずにせよと云はれた主の聖言がわかると共に、人を頼り過ぎることの失望のあることを知つた。

また宗教的には門外關の天理教の王妻は自分の同信の友の病床を見舞如く、肉親に接する如く何くれと病床の世話をしてくれた事は、私にとつては快よい喜びであつた。

宗教其のものの價値は勿論あるが其の宗教を信する者の人格とか、行爲が如何に宗教其のものに重大な役割をするかを思ふ時、私の一舉手一投足は迂闊に出来ないといふ新に示された。

兎に角私は、此の度の病床半月を通し、病む人に自分の心が一歩進められたことを感謝してをる。そして私は神の恩寵と人達の厚意とによつて元氣にせられたのであるから、此の度好意を傾けて下さつた人達に報ゆる爲にも、心の豊かな抱擁力のある信仰に對しては熱火鉄石の持主となつて、スタンダードアップしなければならぬ、と骨身に徹して思はせられた。

一人を起したしめ、潤ひを與へるものは何と言つても人の誠

であり、愛であり、信仰の能力であり、其の人の行き過ぎた後姿に拜み心を傾けさせる程の人徳者の力ではあるまいか。

宿命の人々

成田英治

東北の春も四月下旬ともなれば温ま暖かひ微風と共に櫻の花もふくらんで来る。

こゝ浮世の荒浪をさけて救癪の捨石たらんとして居る私達五自の病友も、のどかな春の一日を選んで觀櫻の會を催した。花を愉しむ病友の群がそちに思ひ想いに散策して居る中を五と私は患者自治會の前を通り抜けて、元新生神社の方に向いて歩いて行つた。神社と云つても昔の面影をとどめて居るにすぎない神殿は取りのぞかれその跡には無慘にも土台石のみが散乱して居りあたりに植えられて居た松、ヒバ、左櫻、等は移り變る時代に抗し得ず又人間の入手も受けられず自然に任かせられて殺風景な姿をあらはにして居る。時々サーと吹いて来る風に一トひら二タひら櫻の花片が頭上を舞ひ下りて来るのも物の衰れを感じられる此の淋しい境内には

誰一人とて人影は見へない。想はゞも私も入園以來十ヶ年有
余を経て居る病院生活十ヶ年過ぎ去つた年月は夢の如しと人
々は言ふ、然し癩を病み生活に疲れ果てた病院生活の十年は
果して夢の如しであつたろうか、嗅、觸覺も視覺もおかさ
れて歪んだ口よりもすら歎息、今日まで生きのびて來られた
事がむしろ不可思議な位とも申されませう。

でも自分達は未だ倅はせの方だと彼は言ふ、私達が入園し
てから滿十年その間二百八十余名の病友が此の嫌はしひ癩の
ためどんな悲惨な一生を終えて逝つた事か……「目は口ば
どに物をいふ」と謂はれて居るその目は奪はれ咽喉は切開さ
れ手足は達摩の如く五官の作用は全きなきまでに破壊され果
てなければ逝く事さえも許されない宿命の集ひなのだ。

噫……人類に最も宿命的なそして慘酷な運命を強へて居る

のは癩なりと今日まで幾多の癩者がさけびつゝ、逝えた事か此
の寂寞とした心境は到底筆舌には表現する事は難しい……こ
んな事を誰れにも語るともなく想ひつゝ、湯殿山の方に二人は歩
んで居た、湯殿山の上口の所まで行くとAさんと云ふ女の病
友と未だ見えないがそれが同じ病友である事だけは、むく
んで居る顔から一目でそれと判る程の患者である、私とKさ
んは、たいくつと散策とそれに見えない二十才前後の青年
癩に心をひかれAさんに話しかけて見た。Aさんの語る處に
よると此の青年はAさんの長男で一昨日來から來て居る事等

をそしてAさんは尙も私達に哀願する様な句調で語る所によ
れば、この青年は二十一才で晴夫さんと言ふ患者で一年程前
より癩は判つて居たが父親は數年前より肺も病み働けなく晴
夫さんの上は姉一人それに妹弟は二人は學校に通ひ十八才の
妹と三人で働いて今日まで病床の父と癩院の母を看て今日ま
で随分苦勞の多い生活を送つて來ましたと尙も言葉を續けて
行つた。今困惑して居るのはこの子は未だ癩の診察は受けま
したけれども定員ちよう過して居りますのでお氣の毒ですが
一時歸郷して頃き度いと云ふ國當局の返答によつて迷つて居
りますと云ふ。これだけ顔が癩のためをかされて居れば歸る
事は中々困難である事等を話し合ひ、明日今一度患者自治會
を通してお願いして見る事にしてお別れした。

次号へ續く

思ひのまゝに

藤井生

政治は生活なり、いつの時代でも山は富士人は秀吉のあ
り。秀吉が政治上の布告第一に時の天下に従ふべしとあつた

と聞く、えらい文章なりぬ、又それが自然なるかも知れぬが地球上の人類として生きて行くには、自由な人として精神的に許さるべきだが終戦までは其れは全然認められなかつた、彼の大正年間の——自由主義者の大杉榮氏の末路は語る。

其れ又勝てば官軍を証明した甘粕大尉後半世記はサムライ日本を語つてゐる。彼は三名も人を殺して誰にたのまれるや満洲國の王者におさまつた、とはどこに神佛ありやと語りしが彼も神の裁きの前には曠野の露と消へぬ、運命の我等にも地球上人類の人として、精神的の自由として許されし選舉權を取消しをやつてゐる、現政治家の頭は少しくどうかしてゐる。其うした頭の政治家も勝てば官軍で通して行けたら僥倖でせうが、そうに行くかな世は日本刀はなやかなりし昔ならぬ。

二十世紀の原子時代なれば無理も通れば正しき事もへこむ時など歴史は語る、時の王子殿下を殺した足利は、「この世をば我が世と思ふもつ月のかけたる事もなしと思ひば」と歌ひ其の通り子孫十三代が生きたからおどろくだが時は流れる。徳川三百年の夢さらば、菊はさかへる姿は枯れる、その菊花も共產主義者はひどい失敬な言論を奉つて居るのには筆者は時代の流れより無茶だと斷言する。

神は弱きを助けて怠らないときく、外出不能の弱き我等にも神の力は偉大なりと聞くなれば待てしほし、明るい希望を

捨てずに時代の正義の力を待つ現實を語る、南の國の幾多の新興獨立國家樹立には本國人も植民地の夢捨て、心より數億の新興國民の行く前途多幸あれと握手を交して居るは世界ニユースの銀幕の中に見出される。道は近きより正しきは最後に世に認められる日のあると。

(思ひのまに葉櫻しげる日)

春

草 本 春 男

春——長い忍従の冬は遠のき、山々にかこまれた我が新生園にも忘れずに終戦五度目の春は訪れた。仰げばどこまでも限りなく明るい、匂ふ様に水々しいコバルトの天空、家々の屋根は若葉の中に輝き、川の流れはさわやかな音をたて、猫柳の銀色の芽もやわらかにふくみ、春らしき感に満ち溢れ間近にきら／＼と眼にしみる白さで迫つてゐた。山々の肌もいつしか幻想的な薄紫の色合に遠くかすみそめて來た。

なつかしい春!! 希望の春!!

山や野の草木も長い冬から解放されて自然の恵みのまゝに

所感

春の光をうけ、青きものは青き光をたゞへ、赤き花は赤き光を輝かして自分の個性そのまゝに何の差別もなく、すべてが美しくすべてが尊く咲いて居る。

自然の姿のまゝ榮え行く花の世界にも雨が降り、嵐は吹いても草木は濡れながらも雄々しく咲きはこり、そしてこれらの淡い草花の匂ひをこめて、まだわずかに底冷えのする温氣を含んだ香ぐはしい春風はそよ／＼と聞け放たれた窓より流れ込んで来る。夜わが足の向くまゝに外へ出る。静な静な春の夜！

「あゝきれいだ」私は夜空の月をじつと見つめ、「何といふ慈愛に充ちた美しい月だろう」私にはそう表現するより外に何も云えなかつた。私のセンチな感情がそう言はしてくれたのかもしれない。私は我を忘れて茫然として月を見つめた。月はますます汚れてくる。空に獨り淋しく照り輝いてゐる月！清く澄んだ月、汚れた浮世を低くみて下界を照らしてゐる月、純真潔白な月、心の女神の様に思はれる。

じつと月をみてゐる心の中の淋しさと美しさが異様に感じ再び月を見直す。月は何と清純なそして憎惡のない純真な自然の造物だらう。そして變らない永遠の生命を宿して！

神は世の人々と共に月を愛し合はうと――。

皆さんの望む樂園が如何にしたら計られるかについて私の所感の一端を拙ない筆を持つて申述べたいと思ひます。

松川 東

それは眞の一字によつて出来るものと私は思ひます。では眞とは如何なる事かと申しますと人間からは眞は生れないと思ふ、ではどこから眞が生れるかと申しますと、「うそから出た眞」といふ事は皆さん知つてゐると思ひます。然りです。人間以上すぐれたるものそれはうそのようなものです、しかしそれを無と思ふ人は有るでせうか、人間ばかりであつたら一体此の地球はどうなりませう、それだから人は人間よりすぐれたるものを求めようとしてゐるではありませんか。其の求める心は同じです、しかし人間以上のものを求めながら人間を拜む人、又人間以上のものを求めながら動物を拜む人、其れは人間なり動物なりを通して絶對者を拜むと言ひますがその絶對者はいつに有るではありませんか。其の爲に其になつたらぬ者を通さなければ絶對者を拜むことは出来ないでしょう。私達には一寸考へられませんか。そして人間よりすぐれたる何者が絶對者は有るだなんて其んな所から眞が生れ

る道理は有りません。

文化とか、愛とか、理想とか種々に云れますがその根本がわからなければ一つの流行語としか思はれません。つまり根の無い花を見た時はきれいでせうが時が来ればなくなりま
す。そこに朽ちざる根。永遠の生命を慕ひつゝ物事に眞を持
つて進むなら、そこから皆さんの望むところの樂園が出来る
様に思つて居る人も有りますが、そんなものは何になるでせ
う。口先で良い事を言い、人目に付く所では美しい事をや

り、そんな事なら小學校で學んで來てゐるはずで。大人に
なつたら大人らしく其れ以上の事をやるべきではありません
か。

人間がどれだけ智力が有りますか螢の光の様な物ぢやあり
ませんか。其の光の中に迷つて居るにすぎないと思ひます、
その眞がわかつてはじめて樂園が建設されるものと私は信じ
ます。



戸伊摩歌壇

扇畑忠雄選

小舟

(秀)

月かげの深くさしこむ部屋にして療養日記ねむごころに記す

(佳)

しろじろといや遠白にながれゆく雲みてありぬひるの岡べに

(佳)

朝露のまだしとどなる木の下に仔羊の乳吸ふ音靜かなり

(入)

この宵を故郷にゐて我が母は一人靜けく我を待ちをらむ

(入)

いたづきにわが細りたるかいなよとしみじみ思ひさすりてみたり

(入)

山深くただに清しき朝日映ゆ新樂畑に蕎麥播かんとす

(入)

つゆの雨けさは晴れたりあちこちに衣干す見えわれも衣干す

(秀)

芽楓の風にそよぎて照り映ゆる木の間木の間に蜂群るる音

(秀)

時既に近づく君は長老を母とし呼びて証す平安

(秀)

聖餐に配られしパンを幼等は祈禱のしじま食ふとてせがむ

(佳)

咲きみちてる並木の櫻蜜蜂の飛び交ふ音のこもるしづけさ

(佳)

離れぬし一人の童クローバの花輪を編みて土手登りきぬ

(入)

馬鈴薯の土寄せし畦畦に砂浴びし小鳥の穴の乾けるが見ゆ

(入)

散りしける花小さくて一面にたたへし露の透き徹り見ゆ

(佳)

朝な朝な髪すきくれる夫の掌の鏡の中をたくみに動く

(佳)

掃きために夕陽浴び居る空罐の光輪まぶしいくつもの色

(佳)

道玄に吹きたまりたる櫻花わがすくいつつ春を惜めり

(佳)

憩ひ居る原に小さき岩つつじ鉢に乗すべく堀り返し置く

(入)

故郷を偲ぶと櫻桃の繁り見る老の夫婦に親しみの湧く
夕されば寮舎々々をもれてくる各宗教にむつみ合ふ聲

櫻花愛でつつめぐる池の邊にちらばりて居る釣りののこり餌

(秀)

娯樂場の建築半ば出来上り風立つ午後をクレオソート匂ふ

(秀)

木の蔭は濡りまだあり散る花の色褪せながら晴れわたりゆく

(佳)

妻病める小さき室に蠅一つ狂ふが如く渦巻きてをり

(入)

ぼんぼりの花観てかへる足なへの歌友二人が窓に語らふ

(入)

夕焼の沼面すれずれ燕飛び夏に入る日の療養の窓

(入)

何回も通りし土手に深々と白き實をもつタンポポ幾つも

(秀)

照りつぎていよいよ空すむクナなりおだまきの紫淡く咲きつつ

(佳)

春となる夕沼の土手歩みをり鯉とびはねし波紋きらめく

(佳)

小雀の鳴きつつ明くる療園の朝をうれしく花壇に佇つ

(入)

しやくやくの紅き芽萌る花壇の濡れ土に陽光うらうらとして

(入)

吾が植えしチュリツプの芽の伸びゆくに心樂く水などやりぬ

(入)

冬枯のさびたる花壇に一叢の水仙の蕾ふくらみそめし

猪 亦 紅 衛

(秀)

咽喉の説明聴きしアメリカ兵等口早にして何か囁く

(佳)

藥臭と膿臭にじむ醜体をアメリカ兵は見下して立つ

(佳)

管入れし吾が咽喉を説明する婦長の言葉美しかりき

(入)

案内の婦長に並び室巡るアメリカ兵は大股にして

(入)

管入れし吾が咽喉を覗きるるアメリカ兵の何か匂ひす

(佳)

木の芽吹く丘に上れば長沼は白く沈めるもやの如しも

(佳)

盆栽の菊の肥料になさむとす腐りし鯉を引上げて来る

(入)

パンヂーを剪らむと女醫のかがみちボーズやさき病める窓邊に

(入)

百人の風邪の診察終へまししマスクはづして女醫先生は

(入)

康夫君にキリストを説くしづ子姉の聖き臨終に胸を打たれぬ

(佳)

宵の灯に照し出されてはの白き櫻に遠く三日月のあり

(入)

軒下に一株咲ける菜の花に蟻たわむれる眞晝しづけさ

(入)

だみ聲の浪曲たえて隣室もしづまる夜更け河鹿なきをり

(入)

雨打ちて冷へゆく窓のパンヂーの開かんとする下うつむけり

(佳)

移植せる葱根付きつつ青さ増す畦の近くをあした散歩す

(佳)

移植せる葱根付きつつ青さ増す畦の近くをあした散歩す

松 野 全 彦

小 泉 た き

瀬 川 鬼 水

小 倉 博

成田英治

(入)

強くあれ強く生きよと今日の日も語る病友の涙尊く



といま俳壇

阿部みどり女選

鈴木碧井

とどまれる目高のひれの動く影
 亂れゐる目高を率ゐ矢の如く
 みの虫のさみどりの蓑牡丹の芽
 朝さくら物差しふつてくる針娘
 天頭虫ころげて肢に毒を吹く

(評) よくこの小さな虫を見つめたものである。ころがつてい

天頭虫の肢に毒をつけていることを見つけたのは手柄である。昆虫
 採集のそれにも似て研究的態度もまた面白い。俳句は科學ではない
 が、一脈通ずるところがある。それについて面白い詩がある。駒草

の十四五年頃活躍していた東大學生の紅葉子といふ人の句に「霜柱
 五分その下の土固き」といふのがある。この句も一寸見ると理科の
 本でも見る様な感じであるが、そう見ては實もふたもなくなる。こ
 の作者は霜柱をよくみつめそれだけでは居られなくなつて指でかい
 てた見のである。所がその下の土の固いのに驚いたのである。その
 驚きがあればこそこの句を作つたのである。俳句はそこが第一であ
 る。童心といへばいへるが大人にも見出のおどろきは數限りなくあ
 る筈である。

梅原一馬

苗札の地より一字のぬれて濃く
 苗札の傾くままに芽吹きけり
 往診のもう来る頃や下萌える

佐々木三玉

東風寄せる淺瀬を濁し鮎の渦
 鯉はねる茜の一とき風光る
 栗駒の峯小紫木の芽晴れ

阿部春月

療養の假の證書に卒業す
 窓みんな開けて療舎や木の芽風
 寝ころべば空あり歌碑に草萌ゆる

松野全彦

牛島の底に驚聴きにけり

枕邊に桶ごと届く花見鮎
三人の心が合ひぬ木の芽みち

宮城素女

つばなる崖のうつろに巢鳥かな
新患の歌碑に佇つみ木木は芽に

橋本小舟

背の子の手を出してゐる櫻餅
葉櫻や毛虫の這へる床凡あり
太き雨紫陽花窓を打ちにけり

(酔) さつきからバサリ／＼と音がする。雨とは一寸ちがうので窓をみると紫陽花の穂が揺れて窓を打っているのである。そこでそのまゝを句にしてしまつたのでは句にならない。そこでもつとよく眺めて太い雨を発見したのである。この発見こそ俳句の第一のものである。

瀬川鬼水

パンジーや開かんとする花下むきて
一瞬の風に見失ふ春の蝶
初夏の水こぼしこぼして炊婦行く

(評) 炊事仕度にいそがしうにあちこちしている女の姿である、初夏の庭には石竹も撫子の紅も見えるであらう、そこをたつぷりと吸んだ水が歩く度に揺れてこぼれている。見ているこの作者ばかりかも知れない、また他に何の意味もなかった見ていはる人も

あつたかも知れない。そこに作意が起きて出来たのがこの句である。至つて静かな客観描寫である。

新患を迎へる寮の櫻かな

菅原權六

ヒヤシンス母を迎へて嬉々と座す

小山一星

(選後感) 大分お休みの方が多いようであるがなるべく休まず。御精進を祈ります。一回ぬけても坂から車が落ちるように入歩するものである。



といま柳壇

濱夢助選

小山史陽

煩惱を捨ててるきびすを強くふむ
花の香へ病む身はせめて爪を切る
あの星の一つを君の靈にする(友急逝)

成田英治

忘却の二字に明るく日を送り

宿命の母子わびしく寮に病み
良心の邪魔をしてゐる札の束

千葉 群鳥

散る花もあり運命へ逆らわず
夜の壁の白さに意慾見透かされ

阿部 春月

一鉢の若葉へ趣味を覗かれる
榮冠の臉に故郷の母がゐる

中野 一風

夜露しみ込んだ草履よどこへゆく
手向けんとすれば水仙うなだれる

(友急逝)

黒木 松水

人生を知らされたのがおそろしい
故郷遠く病んで予の夢妻の夢

山口 和夫

菜の花のふみにじられしこぼれ種
山鳩がおりて散歩足をとめ

山田 幸子

療養の心すなをに髪を梳く
盲目にして人間の春に會い

協和 笑哉

足なげてネクタイを解く花疲れ

群木 ひとば

打ちし身を花に任せて昇天す
いまにみてろとスキツチ切換へる

小倉 博

言ふまいか言はうか煙草の輪を見つめ
夕焼へ二人楽しい明日があり

徳差 正子

人ねたむ心病む身につきまとい
清貧を勵ますものに蟻の列

奥寺 悦子

バイブルへ笑みつ病友悔いるなし
御歌碑へいこいを木の芽風さそう

佐々木 寒月

杖光に氣まゝな蝶のたわむれる
花の芽へ名札は横にねたまんま

井上 和子

心とり戻せば夕陽笑みかける
ヒヤシンス思ひでのわく寮の窓

總評

今回は總じて低調の二字に盡きる。生活を基調とした句が

小山史陽、千葉群鳥兩君あたりの句は集中でも良い方の部ながらそれにしても秀作に推すべきではなかつたのは淋しい。もつともつと堀り下げて真剣になつて頂きたいと思ふ、文字の間違ひも多いやうだから注意されたい。

徳差正子

養療所チヤンケンボンの飴を買ふ(秀)

税金だスリだ火事だを療に古り(佳)

紙屑が舞ふて心の虚をつかれ

ありし日の貌はつきりと古手紙

還り來ぬものの一つに筆の癖

小山史陽

花一つ咲せて寮の春に馴れ(秀)

靜かなる雨なり妻のねむい針(佳)

癒えかけた愉快鏡の塵を拭く

母となる日のない妻の子守唄

協和笑哉

浴衣着の女が匂ふ昇降機(秀)

停電を折よきことに夏座敷(佳)

伊達巻のときすててある青簾

佐々木寒月

理性冷たき世相へ瞳をつむる(佳)

あきらめて己に聞かす子守唄

奥寺悦子

沈む陽へ人間を捨て黙想す(佳)

感情がぶつかり合つたピアノの音

もだへても娑婆にはおかぬ蜘蛛の糸

中野一風

霧の中乙女の影の蝶に似る(佳)

道端へ亂れてふじの惡びれず

畦塗りに馴れた乙女のいゝたすき

安日星女

宵月に孤獨の姿捨てがたし(佳)

愛の灯をともして俺の春にする

生と死をはつきりベツト知つてゐる

山田幸子

花一つ活けて明るい朝の部屋(佳)

やぶけたる障子へ好きな風の道

井上和子

ちぎれ雲ふと亡き母の貌を追ふ(佳)

さて今日も母の言葉を抱いて病む

選評 濱夢助

一、◇ 療養所チヤンケンボンの飴を買ふ

二、◇ 浴衣着の女が匂ふ昇降機

三、◇ 花一つ咲かせて寮の春に馴れ

本集では右の三句が調つてゐた。(一)の微笑ましい環境(二)の季節的な感觸(三)の純情等それぞれの趣きがあった。

尙今集は投稿家が目立つて寡なかつたが質に於ては割合ひ粒揃ひである「といま川柳」のレベルは私は低く見てゐないので或は嚴選と思はれる人もあろうが、それに不満を持つ事なく迫力のある生活吟をどしどし寄せて貰いたいのである。



といま詩

秋山恵三選

★入選★

月に泣く

腫まばたきもせず

佐々木 寒月

千々の思ひをこめて

月の光青白く頬に映す

中天にかかりし月

空は蒼く澄み

さんとして聲もなし

静寂の中に

強く伸びる草木のささやき

はるかただよえる沼

沼の面かがやき

魚飛びて月影くたく

いぜん月中天に高し

我非力なり

凝視する月

涙頬を流る

聲なき聲はささやく

泣け泣けと

音もなく流れ星一つ

★入選★

納骨堂

奥寺悦子

林にかこまれた
九尺四方の

此のひっそりした納骨堂には

幾多の人達の

苦闘の果ての魂が眠っているのだ

社會より追放された癪者たちが

自分達だけの愛の世界をもとめて

そして來た此處も

あまりにいばらが多かつた

しかし地下の彼等も

今此の恵まれた我々の生活を

喜んでくれるにちがいない

なぜならば

彼等は今の世を夢に見て苦闘したので

彼等は言ふだらう

「自分達の投じた一石は

無駄でなかつたと」……………

★入選★

苦惱

徳差正子

真白い雲が靜かに流れ

もう櫻が開こうとしているのに

私は神經痛と闘いながら

汗臭い布團にうづくまつていた

突然 窓硝子が靜かに開いて

「正子さん昨夜病まなかつたの

洗濯物なあい——」

夫の姉さんが優しい瞳を向けてゐる

「えゝ病まなかつたわ」

やつとこれだけ言えた

なぜだろう——

だつて姉さんの手はみんな曲つてゐるんだもの

どんなに不自由な毎日を過している事やら

かえつて私が洗濯をしてあげなければならぬのに

頼むなんて——とても出来ないわ

思ひきつて言おうかしら

「洗濯物ないの」つて

だけど姉さんは怒るだろうか

それとも……悲しむだろうか

★入選★

命の流れ

安日星女

重々しく十一時の時報

魔物の様な静養室の内部は

しづまり返つた三つ病室よりもれる

悲鳴に似たあの聲

動物の様なうめき聲

のどを切開した人達の最後のあがきだ

人生の最後

幾十年の生がい

あゝあの悲鳴によつて閉じるのか
私は

頬を流れる涙を止める事が出来ない

むしばまれ行く生命は肉体は

川の流れと同じく

止める事が出来ないのだ

★入選★

櫻

猪又耕衛

花つけた街路樹の櫻が

人々を呼んでいた

九年前植えられた時は火ばしの様に細く

嵐にもまれ悪童共に叩かれ

木枯の吹く日にはひゆうひゆうないてゐた

今ではすっかり春のよそおいをした

若もののようにたくましく

天に向つてのびてゐる

その下にはとりどりの色彩をもつて描れた

花見あんどんが

昨夜の嵐に叩かれ

人間の無力さを物語るかのよう

醜体を横たえている

★入 選★

街 角 で

千代田 龍夫

ふとすれ違つた女

蒼白い平べつたい顔が

かすかな名残をとどめ

ほこりつばい空を切る

まなびやの春を想いて

なつかしくみえれば

アカシヤの花のみ白く

漠として影もなし

★入 選★

夏 の 夜

橋 本 小 舟

外のとばりが静かに

川に野に遠き連峯にひろがり始めた

川岸の緑の草が夕もやに薄く消えて

薄黒い影が浮ぶ

赤黄色の灯が黒い小舟で線を引いた

大氣と水の流は此の静寂の闇の中に

我が思慮をのんで黙々と進む

あゝ何んと言う静けさ

何んと言う深さ

しかも何んと言う力強さだろう

こんな幽な夏の夜の自然に

私はこの胸で大きく叫びたい



リンカン傳を讀みて

大林 隱石

五月は讀書に魅せられる時候である。

私は昨夜の十時頃から、アブラハム・リンカン傳を讀んだ。著者の野邊地天馬氏とは數年前、東京で開催された全國教育者大會の席上で面接した事があるので、血を沸かし、感興をそゝり、旱天の潤雨に浸る如くとうとう夜を徹して讀み通してしまつた。

リンカン傳を讀んだのは今度が初めてではないが、私の環境がこれ迄有識階級の中に在つたとは異ひ、惨めな病軀を療園に横たへ、病悶の其の開放を渴望するレブナ者の中にあるだけ、犇ひしとせまるものを感じた。それは病者と奴隸！こんな言葉が幾度も強く惱悶を打つからでもある。

私は奴隸になりたくない。だから奴隸を使ふ身にもなりた

くない。

彼にこれだけの眞實と愛熱があつたればこそ、彼は己が生命に賭けて奴隸開放の宿願を果し得たと思ふ。

然しリンカンは一足飛びに愛の人となり愛國の士となつたのではなく、彼の生ひ育ちと環境が齎もたらした偉業事ではあるまいか、

此の意味に於てお互ひリンカン傳は知悉ちしつの事と思ふが、今新たな氣持ちで彼の生涯の一部を觸目しても無駄ではないと思ふ。

一八〇九年二月十二日ロック・スプリングの曠野の粗末な丸太小舎、其處には敷物の代りに枯草を用ゆると云ふ至貧の家に彼リンカンは長男として誕生したのである。

父トーマスは勤勉なる者ではなかつた。随つて生活の不如意は極を示し、文字通り「赤貧洗ふが如し」である。氣へ彼の理解者であり慈愛の母なるナンシがリンカアンの十歳の時、再び歸らざる國に逝つたのである。

其の不遇の中にあつて彼は磨かれた。青年になつても禁酒禁煙父の大工仕事を助け或は日雇人となり、商店員となり、女の下働きをやつても彼の純情と操行は青年の範であり、光であつた。「正直者のエヴ（彼の別名）」「善良なるエヴ」と衆人に好愛されたのは至誠克く之を實行した彼にとつて當然の報賞である。

彼はよく讀書し、研鑽を怠らなかつた。我が國に於ける、尊徳二宮先生をリンカアンの姿の中に彷彿として見る、なればこそ彼は、正規の學歴無くして、辯護士となり、州會議員となり、突破して知名の好敵、ダグラスを屠つて遂にアメリカ第十六代の大統領の榮位を克ち得たのである。

而して彼の宿望なる奴隸解放を鉄石の意志と、愛の盾とに依つて大成した。

私はリンカアン傳中美しいエピソードとして記録されて居る一つの事が何時も腦裡に飛來して離れない。

それはリンカアンが州會議員當時の出來事である。リンカアンが馬に乗り淋しい野原にさしかかつた。すると

道端の泥沼に一匹の豚が泥にまみれて苦しんでゐる。彼は丁度其の時ようやく調へた「一張羅を着てゐたので、豚を救ふと自分の一張羅が台無しになるので」「可愛想だが仕方がない」と、其の場を通り過ぎたものの、豚の悲鳴が耳底に響いてくる、彼は此の悲鳴が氣になり其の儘立去る事が出来なかつた。彼は馬首を廻らし引つ返して泥まみれの豚を救ひ上げたのである。

「なあに服が泥になつても豚の命が助かつて嬉しい、いゝ氣持ちになつた」と氣も軽く馬を進めたと云ふ。

私はこの挿話と癩者の生活と結びつけて考へるのである。現在日本には私公立を通じて十三ヶ所の癩療園が設けられ相當数の病者が療養の恩澤に浴して居る。當新生國にも五百の同病者が治療に衣食に萬全をきせんと願ひつゝ努力して下さる、上川園長先生始め諸氏の厚情に明け暮る過して居る事は感謝の限りであるけれど予算の足りなさ、病棟と設備の足りなさからまだまだ迎へねばならぬ病者を齒をかむの思ひて傍觀の状態にあるとか聞く。

現に當園に入園を申込んで空しく終る人達のある事を目にし又耳に聞く。

其の人達または地方散在の病者は宛然苦惱と絶望とに依つて泥まみれになつて居る悲惨な姿ではあるまいか。

私には救なき癩者の號泣が聞へ、其の家族の呻吟が胸を刺

し貫く、

噫！ リンカーンが身に着けし一張羅を台無しにしたより、一匹の豚を泥の中から救つた事を喜んだ、此の愛熱の情が社會の一人でも多くの人に燃ゆるならば、如何に金結の今日と言ひ乍ら救癩運動に拍車をかけてもらへると信ずる。

當國に岩手寮と稱する病棟があるのだが、これは岩手縣の篤志家の寄贈によるとか、私は全國の人達は勿論ながら、特に奥羽六縣の篤志達が卒先して當國の目的に參與して下さるならどんなに幸いな事であらう。

二昔程前の事であるが、柔順な青年だつたがとてもひどひ薬液中毒者がゐた。私はどうしてもその中毒症から青年を救ひたいものと或る日「君の將來の爲○○の注射を止めてくれ、其の代り自分は十日斷食して苦しみを共にしようじゃないか」と、約束の上で私は斷食を始めた。

時は七月の都會である、一時の十日斷食は實に辛かつたが、勇を鼓して十日の斷食を成し遂げた時、青年某君は注射を止めてくれた。あの節は辛かつたが、私にとつては楽しい思ひ出である。

犠牲は建設への鍵であり、愛は人に生氣を與へる春の風である。

私はこの稿を見榮や外間を装ふ爲に書いて居ない心算であ

る。讀者が癩其の者に眞の開心と同情とを傾けて戴き、救癩促進の役を引受けてもらいたいからである。癩に對し理解と同情と愛心とをそぐ者にとつては、私のなした行爲などは物の數では無い苦である。

リンカーンは奴隸解放のための南北戦争勝利後、參戰將兵慰勞の意味で催したフォード座の喜劇場で、敗敵の兇漢ブースの銃弾に頭部を貫かれ情死した。けれど彼の名は不朽である。

それに較べて救癩運動に如何に参加しても、生命を斷たれる憂が無いばかりでなく、祖國幾萬の癩者及び其の家族が、闇より光を與へるのだと思ふ時、私が言はんとする以上に病者になす可き態度に付讀者は御合點がゆくと思ふ。

もう午前三時に十分を過してをる。祈りつゝ徹宵でこの稿をすゝめて來たが、愚鈍なる故讀者に迫るものを書けぬを遺憾せんである。御賢察を願ひたい。私は最後に一言附記して結論に達したい。

「凡らく世の誰しもがいまわしい癩者になりたくないと願ふてせう。だからこそ奮つて救癩運動に御儘力下さらんことをと——」

(一九五〇年五月二十八日午前四時完)

園内日誌

四月二十一日	觀櫻會第二日 園藝將棋大會	五月十日	午後一時療養懇談會 日赤館
四月二十二日	觀櫻會第三日 お花見寶深し	五月十一日	演劇 小笠原久仁子一座一行十四名
四月二十三日	午後二時 木暮龍太郎一座	五月十二日	晝の部 午後三時—午後六時 夜の部 午後七時—午後十時
四月二十七日	演劇「裏町人生」其の他	五月十三日	天理教 月例祭
四月二十九日	映画會「野良犬」其の他	五月十四日	三井報恩會理事遊佐氏講演會午後二時より
五月	天皇誕生日 休日	五月	日本新生キリスト教會 復活祭 午前九時半 日赤館 鶴田雄二郎先生來園
五月四日	映画會「曉の脱走」其の他	五月十七日	映画會「影をしたいで」
五月五日	子供の日 保育所兒童父母第一回面會午前十時	五月二十四日	春季陸上運動會 新生運動場午前九時—午後三時半
五月六日	第六回縣對抗野球リーグ戦	五月二十五日	阿部みどり女先生來園 俳句指導
五月九日	野球大會終了	五月二十六日	天理教月次祭 三日間講習會
	一位 山形チーム 二位 青森チーム 三位 岩手チーム 四位 福島チーム 五位 宮城チーム	五月二十九日	映画會 鍋島怪猫傳外ニユース
	ホームラン 鈴木清一 大谷渡各一號	五月三十一日	楓會事務所對土工部野球試合 二十三A對五 事務所勝
	打撃ベストスリー	六月二日	聖靈降臨祭 カトリック研究會 英語講座開講青年クラブ
一位 久我富夫 十割 二位 小山 昇 七割一分 三位 松井英治 六割九分		六月四日	參議員選舉投票
		六月八日	清瀨村婦人會參觀
			阿部みどり女先生來園俳句指導

謝 寄 贈

(敬稱略す)

編 輯 後 記

三〇

楓の蔭	一部	救済協會
聖約	三〇〇	聖約社
ともしび	一〇〇	社會奉仕光華團
陽氣 (五月號)	二〇〇	天理教會
みちのとも	一〇〇	天理教會
新しい生活	二〇〇	天理教會
群山	一〇〇	群山發行所
聲 (四月號)	一部	復生病院愛德會
主婦の友 (附録)	三〇〇	主婦の友社
駒草 (五月號)	八〇〇	阿部みどり女先生
山櫻	四〇〇	多摩全生園
青松	一〇〇	大島青松園
日曜新聞	四枚	ともしび社
風の蔭	一〇〇部	救済協會
ダイジエスト	三〇〇	救済協會
川柳宮城野 (五月號)	一〇〇	川柳宮城野社
陽氣 (六月號)	二〇〇	天理時報社
〇良野	一部	星塚敬愛園
ダイジエスト (六月號)	一〇〇	ダイジエスト日本支社
雲海	二〇〇	近藤忠
聖約	二枚	聖約社
駒草 (六月號)	八部	阿部みどり女先生
聲	一〇〇	復生病院愛德會

戦時中建設の當國に於ては、すべての點に不備があり、目前に迫つてゐる改善の中にも、我等の待ち望んだ文化の殿堂新生劇場も、各方面の援助により今月末を以て落成する運びとなつた。これまでの薪炭倉庫の狭い假劇場では觀演兩面に於て不如意なものである。今までの様に混雑もせず、嫌な思ひをしなくともよいと思ふだけでも嬉しい限りである。近郷にその名を知られた新生演劇も、こゝ數年スランプ状態になつていたが、新劇場の落生により劇場に恥ぢない演劇團が生れることゝ信じられます。

清しい青葉のこの頃、夜露にしつとりと濡れた園道を箒目も正しい清掃されているのにお氣づきの事でせう。このさゝいな事でも人々に清潔な感情を湧かしめるものであるといふ事を私達は銘記すべきである。

路傍の名も知られない小さな雜草にも、踏まれても踏まれても、花をつけ實を結ぶ意慾に満ち充ちてゐるのである。この屈せぬ意慾にこそ、生活の意義があるのではあるまいか。伸び行くものは何處までも伸ばして行つてよいのである。

園當局に於ても、小誌に對して余りに無關心でなかつたのではないからうか。小誌は決して編輯者のものではなく、園全体のものであるといふことを忘れてはならないのである。

(まさる記)

昭和二十五年七月五日印刷

昭和二十五年七月十日發行

宮城縣登米郡新田村葉ノ木澤一番地

編輯人 といま編輯部

印刷人 三浦寅治

發行所 東北新生園楓會文化部

と
い
ま

昭和二十五年七月五日
昭和二十五年七月十日

印 刷
發 行

(毎月一回
十日發行)

第三卷第四號